The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 食道癌手術症例の病型分類，合併療法および予後に関する研究 |
| Author(s) | 藤山，武雄 |
| Citation | 大阪大学，1983，博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/33701 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【31】

| | |
|---|---|
| 氏名・（本籍） | 藤山武雄（ふじやまたけお） |
| 学位の種類 | 医学博士 |
| 学位記番号 | 第 6116 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和58年6月1日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 学位論文題目 | **食道癌手術症例の病型分類，合併療法および予後に関する研究** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教授 川島 康生<br>（副査）<br>教授 北村 旦　教授 田口 鐵男 |

## 論文内容の要旨

（目　的）

食道癌根治術は今日では安全な手術となり普及しつつある。しかし術後遠隔成績は多くの報告にみられるように，5年生存率が20％前後と極めて悪いのが現状である。

さて，われわれの経験した食道癌症例を振り返ってみると局所深達度が深くても遠隔転移の少ない症例や，逆に腫瘍が小さくても遠隔転移を起こしやすいものなど予後の著しく異なるものが含まれており，これらの特徴を把握することが食道癌治療成績の向上につながると考えられる。本研究はこのような主旨に基き，術前に判定でき，食道癌の臨床的悪性度を現わす病型分類を行い，各病型に最も適した治療方針を設定し治療成績の向上を計ることを目的とした。

（方法ならびに成績）

教室で切除した食道癌144例について術前のレントゲン所見より食道癌の病型分類を行った。すなわち腫瘍の発育形式を膨張性および浸潤性の2つの形式でとらえ得るとの考えに基き，大きく腫瘤型，潰瘍型および硬化型の3つの基本型を想定した上で，これをさらに細分化して①単純腫瘤型，②不整腫瘤型，③多発腫瘤型，④潰瘍型，⑤潰瘍腫瘤型，⑥潰瘍硬化型および⑦硬化型の7つの病型に分類した。そして，この病型分類およびその病理学的背景，術後遠隔成績や再発形式あるいは合併療法との関係について検討を行った。

1. レントゲン病型と術後遠隔成績

対象例144例の累積5年生存率（以下，5生率）は20.6％であった。病型別に5生率をみると潰瘍型，単純腫瘤型が53％，49％と最も良く，潰瘍硬化型が29％とこれに次ぎ，硬化型，不整腫瘤型および潰瘍

腫瘤型の5生率はそれぞれ17%, 16%, 12%と悪い。多発腫瘤型の予後は極めて悪く1年生存例をみなかった。リンパ節転移の認められなかった$n_0$症例について同様の検討を行ったが全体として予後は良くなるが各病型群の生存曲線のパターンは変らなかった。

2. 切除標本の病理組織所見に関する検討

切除標本のリンパ節転移(n), 食道外膜浸潤(a)および脈管侵襲(ly,v)の所見と予後との関係をみると, いずれの因子もそれが陽性となる程予後が悪くなるが, とくにnの予後に与える影響が大きかった。また, これらの各因子の陽性所見が重なる程, 予後の悪くなることが認められた。レントゲン病型との関係では, 予後の良かった潰瘍型, 単純腫瘤型に比べて予後の悪い潰瘍腫瘤型などでは, これら3因子の重なりの程度が強かった。

3. 再発死亡例の検討

術後死亡例の中76.1%(86/113)が再発による死亡であった。再発形式については, 局所再発, リンパ行性再発および血行性再発に分けたが, それぞれ19.8%, 33.7%および46.5%であった。レントゲン病型別にみると潰瘍型が28.6%と低い再発率であったが, 単純腫瘤型が46.2%でこれに次ぎ, その他の5群では55〜75%と高かった。再発形式と再発時期の関係をみると1年以内の再発は再発症例の中57%を占め, 局所再発と血行性再発が多かった。1年以上3年未満の再発は36%で局所再発が減少していた。3年以後の再発は6%であったが全例がリンパ行性再発であった。

4. 合併療法に関する検討

合併療法は放射線療法とブレオマイシン投与をとりあげ比較検討したが, 合併療法非施行群に比べて, ブレオマイシン投与群では5生率で前者の20%から30%と改善がみられ, 術後予防的照射は4年生存率にて, 合併療法非施行群の9%に対し50%と著明な延命効果を有することが認められた。

(総　括)

1. 食道癌切除症例, 144例についてレントゲン病型分類を行い, 病理学的背景, 予後, 合併療法の効果などに関して検討した。

2. レントゲン病型は腫瘍の発育形式を現わす単純腫瘤型, 不整腫瘤型, 多発腫瘤型, 潰瘍型, 潰瘍腫瘤型, 潰瘍硬化型および硬化型の7つの病型に分類した。

3. 各病型は腫瘍の発育進展形式, 再発形式, 進行度や宿主の反応などを含めて, 予後を左右する臨床的悪性度に関連した腫瘍の特徴を現わしていると考えられる。

4. 合併療法に関しては術後予防的照射あるいはブレオマイシンの併用により食道癌手術成績が改善されることが認められた。

5. 今後は腫瘍の性格や各種治療法の特徴を考慮し, 個々の症例に最も適した合理的治療方針を設定し, さらに新しい治療法の開発, 導入により治療成績の向上を計るべきと考えられる。

## 論文の審査結果の要旨

食道癌の術後遠隔成績は今日なお不良であるが，成績向上のためには，治療開始に先立って，集学的治療スケジュールを適切に設定せねばならない。

本研究は食道癌症例のレントゲン像を詳細に検討して7病型に分類し，その病型分類が予後，病理学的所見，癌の進展再発形式とよく相関することを明らかにしたものであって，集学的治療スケジュールの決定に重要な情報を提供するものである。充分価値ある研究と認める。